

然レドモ大藪終ニ怨言ヲ出サズ友人謂テ曰功彼ヨリ勝レテ祿彼ヨリ少シ祿ハ所言ニ非ズトモ爲之ニ功ノ隠ル、默ベカラザルカ大藪ガ曰我ヲ以恠シトセバ武士之義ヲ失ニ似タリ訴之トモ罪ナカルベシ朋友皆我功ヲ知テ我祿ノ少キヲ愍ムサレバ我不訴シテ我功隠ナシ又何ヲカ訴ン功ノ優劣ハ勇怯ニ繫ルト云ドモ時論ノ曲直アリ曲テ優ンヨリハ直シテ劣ヲ善トス況祿ノ多少ハ古ヨリ貧富ニ因テ勇怯ニ不_レ因_レヲヤ後紀伊大納言頼宣卿ニ仕ヘテ祿千石ヲ受ケタリ交ヲ厚スル者渡邊ト比ベテ祿僅ニ二十分ノ一ナルコトヲ云テ傍ヨリ憤ル大藪ガ曰不然渡邊ガ豐祿ハ名ヲ售節ヲ飾人ニ僞世ニ媚テコレヲ得此ニ由テ過タリト云テ非笑スル者十二七八アリ利ノ上ヨリ觀之バ幸ナリ義ノ上ヨリ觀之バ不幸ナリ我モ豐祿ヲ得ノ道ヲ不識ニハアラズ利ヲ捨テ義ヲ取テ敢テ名ヲ售リ節ヲ飾リ人ニ僞リ世ニ媚コトヲ不爲交ヲ厚スル者聞之テ嘆服ス大藪ガ若キハ誠ノ良士廉夫ナル哉

〔常山紀談^{十六}〕上杉家祿知削られし後士多く暇を取て立去けるに慶次田前を七八千石一万石を以て招く大名あり慶次われ此度の亂に諸大名表裏の心見限たり景勝ならでわが主君とすべき人なし扶持し置てたまはれとて五百石の祿にて民間に引込風月を楽しみ歌樂に心を寄せ源氏物語を講じて世を終れり

〔近世畸人傳^五〕甲斐徳本

徳本は永田氏伊豆武藏の間を行めぐり薬籠を負てかひの徳本一服十六錢と呼て賣ありく江戸に有ける時大樹君御病あり典薬の諸醫手を盡せども愈るしなかりけるに誰かまうしけん徳本を召て療せしめ給ふに不日にして平がせ給ふされば賞としていろくの物を下し賜りけれども敢てうけずたゞ例の一貼十六文に限る薬料をのみ申下したりければ其清白を稱しあへりされば上にもまろし召けん何にまれ願事あらば申べきよし頻に命せられしかばさら